2025 年度事業計画

（自 2025 年 2 月 1 日～至 2026 年 1 月 31 日）

公益社団法人　日本薬学会

Ⅰ はじめに

日本薬学会は約 15,000 名の個人会員と約 200 の団体・企業の賛助会員を擁し、1880 年の創設以来 140 年を超える歴史と伝統を誇る薬学における中核的学術団体です。これまで「くすり」「薬学」をキーワードとするあらゆる学術活動、すなわち創薬から医療までを包括した学術活動、また基礎科学から応用科学までの広範な専門領域に関する学術活動を支援してまいりました。2025 年度におきましても、会員の皆様の支援と学会の発展のために種々の取り組みを進める所存です。

2019 年末より世界的なパンデミックとなった新型コロナウイル感染症を私たちはどうにか乗り越えました。それには、史上初の mRNA ワクチンや新規抗ウイルス薬が早急に開発され、医療人や民間人の別なく国民全体の協力があってこそ実現しました。日本薬学会会員は、医薬品の開発や使用体制の構築、ワクチン接種の普及啓発など学術や教育を通してなんらかの形でこのパンデミック収束に関わりました。これをきっかけに、私たちは薬学のあり方を再度熟考し、その上でこれからの健康的で明るい未来の構築に向けて歩みを進めていかなければなりません。

日本薬学会として、最も大切な責務は学術の発展に寄与し、その成果を社会に還元することです。感染症収束後には、年会や部会で行われるシンポジウムのあり方が大きく変わりましたが、2024 年の第 144 年会（横浜）より、漸く全て対面での開催が実現いたしました。2025 年の第 145 年会（福岡）では、更なる活性化を期待し「薬学エコシステムの推進：異分野連携で拓く未来のイノベーション」をテーマとし、異なる部会、学会、国、業種（薬学研究者、薬剤師）、研究手法（実験科学、情報科学）、世代などの様々な垣根を超え、お互いの情報を交換し、お互いをよく理解し、お互いの繋がりを強く・深くする場としていただきました。

日本薬学会は Chem. Pharm. Bull.（CPB、創刊 1953 年）、 Biol. Pharm. Bull.（BPB、同 1978 年）、薬学雑誌（同 1881 年）の学術誌 3 誌、ならびに学会の情報誌としてファルマシア（同 1965 年）を発行してきました。これらは J-STAGE による閲覧が可能で利便性が向上しています。また 2018 年 10 月からは生物系のオープンアクセスジャーナルとして新たに BPB Reports を刊行するなど、薬学の進展に貢献してまいりました。さらに、2020 年 1 月より CPB および BPB の Newsletter をメールマガジンとして読者へ配信し、最新号の graphical abstracts から、J-STAGE を通していち早く論文にアクセスすることができるようになりました。また、2022 年から e-journal として発行するようになった両誌は、2024 年 1 月 1 日以降にされ、受理された論文は、クリエイティブ コモンズ(CC BY-NC 4.0) ライセンスに基づいて公開することになりました。このライセンスにより、適切なクレジット（著作権者・出典元）が記載されている限り、利用者は記事を非営利に利用することができます。投稿から出版までの期間が短縮され、より利便性が高まることから、投稿数の増加を期待しています。また、本年は学会誌であるファルマシアの記事をスマートフォンなどで、どこでも閲覧できるように e-book として 2025 年 1 月 61 巻 1 号より発刊致しました。

日本薬学会では、日本学術会議未来の学術振興構想（2023 年版）に採択された「デジタルツインによる創薬と医療のパラダイムシフト」を実現すべく、データ駆動型 AI 創薬研究推

進 WG を開始しました。その目的は、創薬における AI 活用面において、データサイエンティストと薬学系 実験科学研究者の間のギャップを埋める「ハブ」となり、AI を創薬研究に活用できる 実験科学研究者の裾野を拡げることです。まずは、AI 創薬入門者向けの講義の作成から開始する予定です。

日本薬学会は、国際交流にも力を入れています。これまでアジア医薬化学連合（AFMC）との連携を積極的に行い、またドイツ薬学会（DPhG）と韓国薬学会（PSK）との相互交流やドバイ国際医薬品会議 （DUPHAT）への講師派遣など、国際的活動を推進してきました。韓国薬学会やドイツ薬学会の他に新たに台湾薬学会（2023 年 9 月）、カナダ薬学会（2024 年 6 月）と二国間交流協定を締結し、それぞれシンポジストの派遣及び招聘し積極的に交流を行っています。第 145 年会（福岡）では、国際シンポジウム「予防薬学・環境薬学」として、韓国、カナダ、タイのシンポジストを招きます。これまで、次世代薬学アジアシンポジウムとして年会の中で国際交流を展開してきましたが、今後はアジアに留まらず、積極的に世界の研究者と交流を推進してまいります。

日本の学術活動が 2000 年以降急速に低下していることが、発表論文数、引用回数、博士課程学生数など、多くの指標で明らかにされています。学生の博士課程への進学率を高め、次世代を担う若い研究者・教育者を育成することは、わが国の科学・技術力の復活に急務となっています。そのため、わが国では大学院学生および若手研究者支援を目的に、既設の学術振興会特別研究員制度に加えて、2021 年には文部科学省は若手研究者育成を目的に、科学技術振興機構の次世代研究者挑戦的研究プログラムが開始されました。日本薬学会はすでに 2015 年から博士課程への進学促進を目的に長井記念薬学研究奨励支援事業を開始し、給付型の奨学金を提供し、全国の学生を支援しています。2022 年より本事業受給者を対象として創設した若手研究者賞の受賞者を第 142 年会で顕彰するとともに長井記念薬学研究奨励支援シンポジウムを開催して、若い世代の研究者に授賞者からのメッセージとエールを送ってもらっております。また、従来の本学会奨励賞に加え、2022 年度より開始した本会女性薬学研究者奨励賞も 4 回目を迎え、漸く会員に浸透してきました。さらに、各支部や部会における様々な顕彰事業を通じて若手研究者の支援に努めています。日本の科学力・薬学研究力の一層の発展を期待し、このような支援を長期的に実施してまいります。

2019 年末に始まった新型コロナウイルス感染症に対して、人類は科学の力によってパンデミック克服にチャレンジし、mRNA ワクチンや抗ウイルス薬の開発が想像を超えるスピードで達成されたことで、ニューノーマルの時代が切り開かれました。本学会におきましても、専門性の異なる 10 部会が、部会どうしの交流を活発化し、異分野融合によって薬学領域に革新的な研究を創造されることを期待しています。

上述した活動を一層充実するために、日本薬学会は次世代の更なる発展へ向けて、学会活動の基盤となる会員増加を目指します。2023 年から、正会員の中にシニア会員およびジュニア会員区分を新たに設けて、幅広い年代に学術情報と交流の機会を提供できるよう検討を進めております。急速に進展するデジタル変革の動向を見据えて、会員が求める情報、コンテンツ、インセンティブ、満足感等を分析し、会員を増強するための方策と日本薬学会の活動の活性化に繋げるべく検討を続けてまいります。

Ⅱ　事業計画事項

１　2025 年度代議員総会の開催

日時：2025 年 3 月 26 日（水）
場所：福岡国際会議場

２　学術研究・教育活動の推進

１）学術誌の発行

（１）発行と情報発信

質の高い研究成果の投稿を促進しながら、出版までの作業を迅速、正確かつ効率的に進め、国内外への情報発信を積極的に行い、薬学ならびに関連諸科学の発展に寄与してまいります。各誌の特性、薬学という広範な専門性をカバーできる編集体制を整え、学術論文発表の場の提供と学会賞受賞記念総説の掲載など、誌面の充実を推進いたします。誌面に携わる関係研究者の意見を広く取り入れ、学術誌発行の意義と成果につき、オープンアクセス化を契機にさらなる飛躍を目標に検討を行い、需要に即した価値のあるジャーナルを目指します。

本年度の学術誌の発行予定は次のとおりです。

・YAKUGAKU ZASSHI（第 145 巻）年 12 回
・Chemical and Pharmaceutical Bulletin(CPB)（第 73 巻）年 12 回
・Biological and Pharmaceutical Bulletin(BPB)（第 48 巻）年 12 回

（２）授賞

学術誌発行において審査に貢献した査読者、被引用数の高い論文、掲載数の多い著者（連絡著者に限る）を選考し、賞を授与します。

① Top Reviewer Award
　YAKUGAKU ZASSHI、CPB、BPB
② Highly Cited Review Award
　Highly Cited Article Award
　CPB、BPB
③ The Most Published Author Award
　CPB、BPB

２）生物系オンラインジャーナル「BPB Reports」の発行

生物系のオープンアクセスジャーナルで速報誌としても位置付けられる「BPB Reports」を 2018 年 10 月より発行しています。発行責任は環境・衛生部会です。「BPB Reports」の編集委員長が学術誌編集委員会の部門長を兼ねることにより、日本薬学会のジャーナルとしての情報共有と一貫性を保ちます。

３）J-STAGE との連携

国際発信力強化の一環として J-STAGE と連携し、YAKUGAKU ZASSHI の即時オープンアクセスへの対応など新たな取り組みへの参画、公開内容の充実を図ります。

４）学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

（１）年会の開催

年会はひとつの学術大会の枠にとどまるのみでなく、日本の科学研究に貢献する重要な事業であり、本学会の目的である薬学の進歩・普及ひいては学術文化発展の実現を支援しています。特に薬学を学ぶ学生にとっては学会との最初の接点となる場であり、また、薬剤師職能団体や製薬企業関係者との相互連携およびドイツ、韓国、台湾、カナダの薬学会など国外の団体との交流促進の場となっております。

第145年会（福岡）は「薬学エコシステムの推進：異分野連携で拓く未来のイノベーション」をテーマに開催いたします。

具体的には従来通り一般学術発表、シンポジウムの他、特別講演、学会賞受賞講演を行います。シンポジウムでは薬学会と他学会とのジョイントシンポジウムなどとともに、新たに公募によるスポンサードシンポジウム（アカデミア・産学連携）を開催いたします。

薬学が単一の分野や専門知識だけではなく、多様な学問の力を必要とする総合科学であり、従来の垣根を超えた更なる異分野連携が極めて重要となっていることから、様々な垣根を超え、お互いの情報を交換し、お互いをよく理解し、お互いのつながりを強く・深くする場となることを祈念しています。

（２）部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者・薬学生など次世代を担う優れた人材の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会ならびに顕彰活動などを通じ、各部会の特長に合わせて特色ある活動を進めてまいります。部会活動の円滑化をはかるため、部会長会議を開催し、連絡調整・情報交換を行います。

（３）支部の活動

支部は、会員と日本薬学会との接点の場です。地域薬剤師会との交流、最新薬学講習会、卒後研修会、高校への薬学ガイダンスなど地域に密着した積極的な事業展開を行い、特に６年制の学生の支部大会への参加を積極的に奨励し顕彰するなど、学生会員の確保に繋がるよう努力してまいります。支部長会議では、理事会の動向を把握し、ともに連繋しながら活性化を推進してまいります。

（４）創薬セミナーの開催

創薬セミナーは日本薬学会の看板セミナーです。「創薬」を中心テーマとする本セミナーでは、産学官の第一線で活躍する講師の講演をじっくりと聴き、参加者が自由な雰囲気の中で創薬について意見交換する事を重要視してきました。これを実現するため、全ての参加者は、同じホテルに泊まり、寝食を共にする開催形式をとっています。

2025 年度の創薬セミナーは、昨年と同様にメルキュール長野松代リゾート＆スパにて開催の予定です。講演会では、社長講演、特別講演に加えて、日本を支える基幹産業としての製薬業界の今後を展望し創薬研究の最先端を学ぶことのできるプログラムを予定しています。また、自由討論会や懇親会など、参加者どうしが積極的に交流し、創薬研究について深く語り合うことのできる機会をふんだん

に提供します。これに加えて、スタートアップやアカデミアの創薬研究者が参加できる新企画「創薬相談会」を 2024 年度より導入しており来年度も継続して開催の予定です。また、2025 年度は第 40 回の記念となる特別企画を計画しています。特別企画では、創薬セミナーのこれまでの歴史を振り返りつつ、我が国の創薬研究が進むべき将来を改めて考える機会を提供したいと考えています。

５）学術研究・教育活動の奨励・表彰

（１）研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者を輩出することを使命として、学位を取得するための研究に専念できる環境を整備するべく長井記念薬学研究奨励支援事業を行ってまいります。2025 年度も同様に募集を行い、支援事業の趣旨に沿って選考を行ってまいります。

（２）授賞

日本薬学会の学術研究評価および活性化事業として、会員の卓越した業績に対し、下記の賞について授賞候補者の推薦募集を行います。選考手続きを進めるにあたっては、それぞれの賞の趣旨に沿って選考を行ってまいります。

①	薬学会賞	４件以内
②	学術貢献賞	６件以内（1 件/1 部門）
③	学術振興賞	６件以内（1 件/1 部門）
④	奨励賞	８件以内
⑤	女性薬学研究者奨励賞	２件以内
⑥	創薬科学賞	２件以内
⑦	教育賞	２件以内
⑧	功労賞	１件以内
⑨	佐藤記念　医療貢献薬剤師賞	１件以内

（３）他機関関係賞などへの推薦

各種財団・機関が募集する関係賞や研究助成などの本学会への推薦依頼に対し、内容を検討の上、本学会会員より候補者を積極的に推薦します。さらに、国（省庁）による表彰についても候補者の推薦依頼に応じて同様に推薦します。

６）薬学教育基盤の整備

“薬学教育”は薬学における社会に貢献する人材を育成する基盤であり、日本薬学会会員にとって学術活動の基礎を成すものです。本学会員である大学教員、薬剤師および創薬研究者には、変化する社会と進歩する医療・科学技術をリードする学識と学術活動が求められています。大学ならびに大学院の薬学教育課程は、それらに必要な能力を修得する重要な課程であり、課程修了後も生涯にわたって研鑽を続ける必要があります。“薬学教育”は大学での卒前教育に限定されるものではなく、卒前・卒後のシームレスな“薬学教育”の重要性が増しています。

薬学に関する学術の進歩を持続するためには学術活動に従事する人材育成が欠かせません。しかし、現在は 6 年制薬学教育課程から大学院博士課程への進学者が激減し

ており、今後、研究マインド・能力を身につけ博士として学術を推進する人材（学会員）が不足する懸念が生じています。その課題を踏まえ、薬学教育委員会は、日本薬学会の目的である「薬学に関する学術の進歩および普及をはかる」に沿って、今後の学術進歩を担う若手人材の育成に貢献する活動を引き続き行ってまいります。

3　学会情報の配信

学術教育研究や医療における薬学の貢献を広く周知し、さらに薬学関連の行政･産業等の最新動向を、会員のみならず一般市民とも共有することで、社会における医療、福祉及び健康の発展に寄与してまいります。会員に対しては、会員のニーズを的確に把握してその満足度の向上をはかり、非会員の薬学関係者に対しては本学会活動の意義を理解していただくことで入会を促し、一般（広範な非会員）の方々に対しては、薬学と医薬品に対する関心と理解を深め、本学会活動への賛同・支援の獲得に努めてまいります。

（１）社会への発信

日本薬学会では 2016 年度から男女共同参画推進の取組みを開始し、2017 年度には男女共同参画学協会連絡会にオブザーバー学協会として加盟しました。2020 年度から、多様な属性の人材が活躍できる Inclusive な社会作りを目指した活動に取り組むために、委員会名を「ダイバーシティ推進委員会」と改め、さらに女性研究者のキャリアアップ並びに研究活動の支援を進めるために、「女性薬学研究者奨励賞」の設立を理事会に提案し、2022 年度の授賞に向け 2021 年度からこの顕彰活動をスタートしています。 また、本学会においては、第 137 年会（2017 年仙台）より毎回、ダイバーシティシンポジウムを理事会企画シンポジウムとして開催してまいりました。具体的な企画運営はダイバーシティ推進委員会が担当しております。来年 3 月の第 145 年会（福岡）では、「ダイバーシティを実現する組織を創る」と題して、第 9 回目のシンポジウムを開催いたします。日本薬学会が関わる医療・教育・行政・製薬を含む幅広い分野において、誰もが未来に向かって夢を持って活躍できる「組織」の進化をめざして討議を予定しております。尚、上述の男女共同参画学協会連絡会につきましては、2023 年 11 月より正式加盟学協会となっております。

さらに、2024 年度より新たに、日本薬学会が実施する緒活動について、ダイバーシティに対する配慮の点検と提言を行い、支部会・部会活動における足元からのダイバーシティ活動の促進に取り組んでおります。2025 年度もこの活動を引き続き継続し、日本薬学会全体のダイバーシティに対する意識の向上、並びに活動の深化に努めてまいります。

（２）会誌の発行

薬学は、創薬・生命科学の基礎研究から創薬開発、薬の臨床応用、薬剤師教育まで幅広い領域をカバーし、また日本薬学会は大学等のアカデミアに属する教員、学生から薬剤師、企業人まで広範な会員で構成されています。ファルマシアは会員誌として、会員に広汎な情報を提供するのみならず、学会の広報として内外の情報を分かりやすく、また親しみやすく提供することも目的としています。

また、新規会員の増加につながるよう、創薬に関わる若い研究者、臨床現場の

薬剤師、学部学生・大学院生などが興味を持つ読物をさらに充実させて魅力ある雑誌をめざすとともに、広報委員会との連繋を図りながら、医療薬学系読者向け分野のテーマの充実を目指します。

なお、本学会会員には、毎月初頭に発行のお知らせをメール配信するとともに、購読者番号とパスワードの入力により、HP にてデジタルブックと J-STAGE 登載の WEB 版を閲覧可能としております。また、発行後 1 年経過した掲載分を全文公開することにより、ファルマシアを広く周知出来るよう情報発信に取り組んでまいります。

（３）ホームページの運営

学会における学術活動や事業に関して、最新情報の提供を迅速に行うとともに、薬学に興味のある中高生や一般の非会員向けに情報を整理し、それぞれ見やすいレイアウト、魅力となるコンテンツづくりを目指します。会員数増加に向けての WG の提案をホームページに反映していきます。

英語での情報発信で、日本薬学会の活動を海外にアピールします。

新たなコンテンツとして、中高生に向けて薬学の魅力をアピールするため、「夢ナビ」コンテンツを使用した会員の研究活動の情報発信や薬系企業・団体の一般向け情報のポータルサイト構築を目指します。

（４）メールマガジンの配信

メールマガジン「PSJ ファームナビ」を配信することにより、会員へ日本薬学会の理事会方針を速やかに伝達し、情報を共有します。また、学術誌編集委員会と連携した会員や学術誌著者宛英文ニュースレター、ファルマシアデジタルブック版の公開情報配信など、積極的な情報発信を行います。

（５）報道機関対応

メディア（報道機関等）に対して、薬学と薬学会に関連する最新情報の提供と意見交換の場を設けることで、社会へ向けて開かれた学会としての窓口構築に努めます。

（６）刊行物

2024 年度に制作した薬学を紹介するポスター資料「医療・薬学で日本、そして世界へ貢献」が、薬学のすそ野を広げるため活動に広く使われるよう目指します。

既存の薬学を紹介する小冊子 2 種（「これから薬学をはじめるあなたに」「高校生のための薬学への招待」）に医薬化学部会制作の「創薬科学のすゝめ」を加え、学会内および高校・大学等、その他関係機関での活用を促し、薬学への関心が高まるように努めます。

（７）将来構想の検討

より有益な情報発信を目指し、広報委員会から他の常置委員会、部会に情報発信の提案を行う体制を構築するとともに、会員の利便性を高めて薬学会の魅力を

向上させるため、適切な情報発信方法を引き続き検討していきます。

４　他機関との交流協力とグローバル化の推進

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献します。

（１）共同主催、共催、後援、協賛

日本学術会議における薬学研究者の活動を支援するため、シンポジウムを共同で主催します。また、本学会と密接な関係を持つ団体が主催する関連学術集会（国内、国際）の共催、後援、協賛を行い、薬学研究者の活動を支援するため他機関との連携を進め、環境を整えます。

（２）グローバル化の推進

① 国外学会・団体との交流

・ドイツ薬学会（Deutsche Pharmazeutische Gesellschaft: DPhG）

秋に行われるドイツ薬学会年会に本学会より代表者２名を派遣します。また、ドイツ薬学会を通して、ドイツ化学会が開催する Frontier in Medicinal Chemistry: FMC へ医薬化学部会より研究者１名を派遣します。

・韓国薬学会（Pharmaceutical Society of Korea: PSK）

第 145 年会（福岡）にて韓国薬学会より代表者１名、シンポジスト２名を招へいし、合同シンポジウムを開催します。

・台湾薬学会（Pharmaceutical Society of Taiwan: PST）

2023 年に締結された MOU に基づき、奇数年には、台湾薬学会年会で開催されるシンポジウムを企画予定です。

・カナダ薬学会（Canadian Society for Pharmaceutical Sciences: CSPS）

第 145 年会（福岡）にてシンポジストを招へいし、合同シンポジウムを開催します。また、CSPS Symposium へ講師２名を派遣予定です。

・タイ Thai Pharmacy Consortium of Thailand: PECT）

2024 年 11 月に代表として Pornsak 氏が来日し、本学会との MOU が締結されました。

第 145 年会（福岡）にてシンポジスト 1 名を招へいし、合同シンポジウムを開催します。

また、PECT 年次総会で開催するシンポジウムを企画予定です。

・アジア医薬化学連合（Asian Federation for Medicinal Chemistry: AFMC）

アジア諸国の経済成長と学術環境の急速な発展に鑑みて、アジア諸国薬系大学との複数の学術交流基盤を活用して、アジア太平洋地区の次世代の薬科学者の育成と学術交流ネットワーク形成に資するべく、活動予定です。

・佐藤記念国際賞

2025 佐藤記念国際賞の授賞式ならびに受賞講演を行います。

５　学会基盤の整備・確立

１）会員関連

（１）会員増強への取り組み

日本薬学会は、薬学に関する学術の進歩および普及をはかるべく、薬学関係者・会員の研究成果の発表および研修をする機会を提供し、もって日本のアカデミアおよび企業における基礎・創薬研究、社会的要請に応えた薬剤師養成や医療関連研究の発展に貢献してきました。近年では、国際化や薬学教育改善への取り組み、薬学生への支援事業、海外会員獲得の取り組みなど活動の範囲を拡大しております。

次世代の更なる発展へ向けて、これらを一層充実するために、学会活動の基盤となる会員増加を目指します。2023 年から、正会員の中にシニア会員およびジュニア会員区分を新たに設けて、幅広い年代に学術情報と交流の機会を提供できるよう準備を進めております。

本学会の趣旨に賛同し、活動をご支援いただく賛助会員の増員を目指いし、本学会事業を紹介する具体的な取り組みを行います。

急速に進展するデジタル変革の動向を見据えて、会員が求める情報、コンテンツ、インセンティブ、満足感等を分析し、会員を増強するための方策と日本薬学会の活動の活性化に繋げるための提言を取りまとめることを目的として、会員数増加に向けてのワーキンググループにて検討してまいります。

（２）名誉会員、有功会員ならびに永年会員の推薦

定款第 5 条に基づいて、代議員総会において名誉会員を決定し、理事会において有功会員および永年会員を決定します。

（３）会員システムの運用

2022 年 6 月より運用開始した会員システムにて、会員の利便性向上のために更なる改善を進めるとともに、学会活動に必須となる情報収集とデータ活用において柔軟な対応を行います。

２）長井記念館の維持管理

現長井記念館は 1991 年の竣工から 30 年以上が経過し、今後、修繕費の一層の増加が見込まれています。複数の大規模修繕を数年以内に実施する方向での修繕計画ならびに現長井記念館の改築に向けて、より一層主体的に検討するため、2021 年 12 月より長井記念館改修に向けてのワーキンググループが活動を開始しており、昨年度、修繕ならびに改築に必要な準備金の積立と年度ごとの収支予測などの議論を進めました。引き続き会館の改修・諸設備の保守営繕と改築案を策定・実行いたします。

３）賃貸収入と会館の運営

公益社団法人　日本薬学会では、収益事業である会館の賃貸収入の多くを、公益事業である本部・支部・部会の学術事業に繰り入れております。このように、本学会の運営において、長井記念館からの賃貸収入は大きな財政基盤となっており、その安定した利益の確保と会館の維持・更新は不可欠なものであります。従って、会館への再投資のための準備金の積立を計画的に行う必要があります。本学会では、変化する社

会情勢に対応して、学会運営を可能とするため、専門家の意見を積極的に取り入れ、長期的な視点で堅実な計画を立ててまいります。

また、ホールならびに会議室の利用率の増加や継続的なテナント（オフィスの賃借人）の確保に努めることにより、安定した収入を受理できるよう努めます。会館の各施設および設備の効率的な利用の向上を積極的に計ることで価値を高めるため、改善計画を策定してまいります。

４）デジタル技術を活用した学会活動・運営の効率化

新型コロナウイルス感染防止対策のため、日本薬学会年会をはじめ各種の学術集会がオンライン開催になり、理事会、部会や支部会などの会議のオンライン開催が急速に一般化し、学術集会のオンライン化は情報交換・交流活動の低下に繋がらないように行われました。また、各種会議のオンライン化は、移動時間・会議費用の削減、ペーパーレス化、さらには、状況に応じて臨機応変に開催が可能であり、意思決定の迅速化等、歓迎すべき面が明らかになりました。本学会では、引き続きデジタル技術を活用したデジタルトランスフォーメーション（DX）を、学会運営の効率化と学術活動のより一層の発展のために実施する計画を立ててまいります。

以上